

Rare sheep



Manx loghtan

No. 4

目 次

レア・シープと私（イギリスの巻②）	正田 陽一	1
ウール部門の調査結果	山本 実紀	2
日本の羊 取り組み部門	豊岡 均	4
ホワイト・マークの羊たち	本庄 義雄	7
羊と共に生きる	原 宗茂	8
マンクス・ロフトンのウール	百瀬 正香	9
誌上ギャラリー	下山里香子	11
研究会オリジナル商品紹介		11
飼料計算 その後	豊岡 伸子	12
自己紹介		13
家畜羊の祖先を探る（現存する野生羊とその分布）	正田 陽一	14
毛刈り講習会に参加して	金指 歳	17
会計報告（1992年1月～12月）		18
会費振り込みのお知らせ、第4回カラード・シープ・国際会議、編集後記		19



表紙イラスト：笠原 徹郎

本文イラスト：佐藤しおり

レア・シープと私 (イギリスの巻②)

正田 陽一

幼い頃の私を大変可愛がってくれた近所のお婆さんが居た。私の項のほくろを見ては、「これは衣装黒子だ。坊っちゃんはきっと大きくなったら衣装持ちになられる。」と言ってくれていたそうだ。母に聞いた話である。

今、私は洋服筆筒を開けるたびに「背広を何着以上持っている人を”衣装持ち”と言うのかな？」と考えこんでしまう。88才になる母は「迷信ほど当てにならないものは無いネ」と笑うのだが・・・。

こんな私にも、他人様に自慢できる衣装(帽子やマフラーをこう呼んで笑われるかもしれないが・・・)が2点ある。

一つは研究会の発足会の時に頂戴したマンクス・ロフトンの毛で編んだマフラー(百瀬さんの作品)であり、もう一つはヤコブの毛で作られたハンチングである。両方ともイギリスの稀少品種で角の4本あるヒツジのウールを原料としている点が共通している。

マンクス・ロフトン種(Manx Loaghtan)について、ここでくくだ説明することは蛇足というものであろう。会報の表紙で毎号おなじみの品種である。上品な薄茶色の毛糸で編まれたマフラーは、汚すのがもったいなくてナフタリンを沢山入れたビニール袋で、筆筒の奥深く大切にしまっている。

ヤコブのハンチングは20年以上前、イギリスのロイヤルショウの会場で購入したものだ。ヤコブ種(Jacob)は、別名スパニッシュ・パイボールド(Spanish Pie-bald)とも呼ばれ、一般には半島戦争の折に難破したスペイン船のもたらしたものとされているが、ヘブリデス諸島の4本角のヒツジ、セント・キルダ種(St. Kilda)の血も入ってるらしい。被毛は黒褐色と白の斑である。

本品種の名前の由来については、おもしろい話がある。旧約聖書創世記第30章に、ヤコブが義父ラバンの羊群を預かり、その労働報酬として群の中の黒白斑のヒツジを分けてもらう約束をする話が出てくる。ずる賢いヤコブは群の中の繁殖力のある雌羊に、斑紋のある雄を交配し、やがて全群がヤコブの所有になってしまうのだが、本種の黒白斑の毛色からヤコブの名がついたのであろう。

黒色部と白色部を分けて紡いだり、混ぜて種々な色合の糸にしたりして、自然の色調の織物が楽しめる。

私のハンチングも3色の糸が混ざり合った、渋い杉綾織りの布で作られていて、なかなか素敵な帽子なのである。ただ、残念なことに私がかぶると、どうも様にならない。真直ぐにかぶったり、斜めにあみだにかぶったり、鏡に向かっていろいろ工夫したのだが、自分でも「似合わないナ」と思っているうちに、「バブル崩壊後の不動産屋みたいだ。」と酷評する友人も出てきて、とうとうこの帽子も、ナフタリンと共に筆筒の底に眠る運命になってしまった。

ウール部門の調査結果

山本 実紀

今年も毛刈りの季節がやって来ました。昨年、日本の羊毛調査のためにフリースの提供をお願いしてから一年。日本では、スライバーやトップという加工状態からの検査機関はあっても素材としての羊毛については、調査方法も検査機関も今の所、見つかっていません。東北大学の八巻先生、大内さん、清水さん、本出さんと相談しながら、できることから調査を進めてきたという所ですが、現在出ているデータの報告と今後の調査のベースになることをまとめてみました。

明3才の経産羊(♀)、牧場で一番多い品種、そして牧場内の平均と見られるフリースという条件でお願いしました所、お送りいただいたのは9フリース。北海道から3牧場、東北から3牧場、関東2牧場、中部1牧場でした。品種はサフォークが5フリース、コリデールが2フリース、ポールドーセット1フリース、サウスダウンとブルーロードーセットのクロスが1フリースでした。(ただし北海道のサフォーク(A)は明4才)

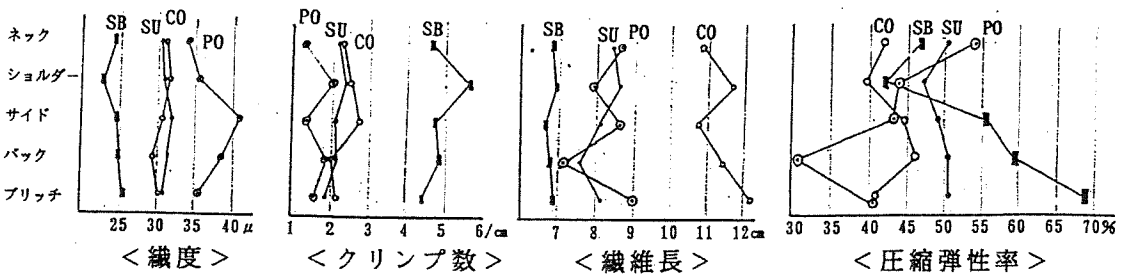
送られてきたフリースは、総量を計り、スカーティング(裾物を外す)後、5つの部位(ネック、ショルダー、サイド、バック、ブリッチ)に分けられ、以下の調査を部位別に行いました。

- ・ 織度：エアフローによる平均直径。単位 μ 。
- ・ 繊維直径：顕微鏡による実測(ショルダーのみ)。
- ・ 1cmあたりのクリンプ数。
- ・ 毛番手。セカント(S)
- ・ 繊維長：ステイプルを実測。単位cm。
- ・ 圧縮弾性率：繊維の復元力。JISのバルク法により測定。
- ・ 夾雑物：羊毛をNaOHで処理して残った植物性夾雑物をろ過、乾燥させて計算。最初の量に対する割合(%)。
- ・ 洗毛歩留り：洗毛後の重量から夾雑物を除いた量の最初の量に対する割合(%)。

9フリースを品種別にそれぞれの項目の数値を平均し、比較したのが次の表です。

< 品種別による比較 >

		織度 μ	クリンプ数 /cm	繊維長 cm	圧縮弾性率 %	夾雑物 %	洗毛歩留り %
● SU	サ フ ォ ー ク	31.1	2.3	8.1	47.5	2.79	65.2
○ CO	コ リ デ ー ル	30.5	2.2	11.3	42.9	0.67	72.4
◎ PO	ポ ー ル ド ー セ ッ ト	37.0	1.6	8.3	42.3	1.08	75.7
■ SB	サウスダウン×ブルーロードーセット	24.4	4.8	6.9	54.8	0.97	70.7



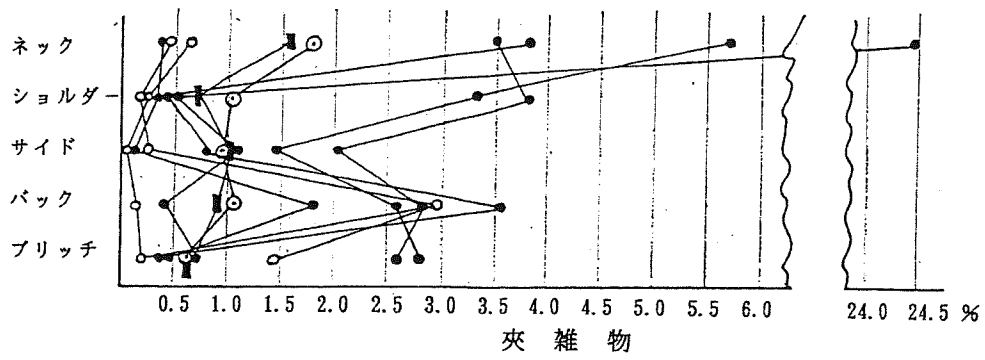
品種による特徴がこれらからある程度読み取れます。また、織度とクリンプ数の関係—クリンプ数が増えると繊維は細くなる傾向—や繊維長、織度の品種による大体の位置も見る事ができます。けれども今回、ポールドーセットとサウスダウン・ブルードーセットのクロスは一例ずつ、コリデールも二例ですので、品種によるものか牧場による特性かは疑問のままですが、今年はこの数値、こんな様子でしたという位の感じで見ていただいて、答えは今後の調査に委ねたいと思っています。

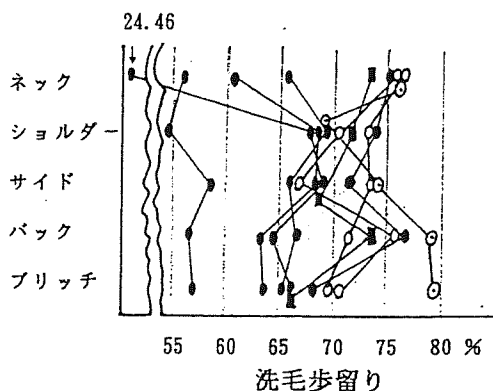
< 農場別による比較 >

*フリース量はスカーティング後の重量

		総量 kg	フリース量 kg	織度 μ	番手・s	クリンプ数/α	繊維長 α	圧縮弾性率 %	夾雑物 %	洗毛歩留り %
S U	A 北海道	3.85	3.45	34.7	54	2.8	8.7	51.2	0.61	72.5
	B 岩手県	2.39	2.28	32.9	56	2.1	6.3	43.1	1.30	66.6
	C 岩手県	2.85	2.35	31.4	58	2.1	8.8	51.6	5.92	58.5
	D 埼玉県	2.70	2.16	27.7	60	2.6	7.5	52.9	2.96	56.6
	E 静岡県	3.20	2.90	29.0	60	2.2	9.5	48.5	3.17	65.0
C O	F 岩手県	5.80	5.27	31.6	56	2.3	11.9	44.2	0.26	72.0
	G 千葉県	3.85	3.30	29.3	54	2.1	10.7	41.5	1.07	72.8
P O	H 北海道	2.14	1.90	37.0	50	1.6	8.3	42.3	1.08	75.7
S B	I 北海道	2.50	2.00	24.4	64	4.8	6.9	54.8	0.97	70.7

今回ご協力いただいた牧場は、飼育頭数40～70頭位が3牧場(D・E・H)、200頭前後が3牧場(C・F・I)、300頭規模(A)、400頭規模(G)がそれぞれ1牧場でした。牧場で一番多い品種を送っていただいているのですが、羊群構成はサフォークのみが1牧場(D)、(F)と(G)はコリデールが主ですが、サフォークも居るという構成で、サフォークが主でコリデールやチェビオット、サウスダウン、ペレンデールなどの他品種がいるのが(A)・(C)・(E)の牧場です。(H)・(I)は今回の中では品種の違うポールドーセット、サウスダウン、フィンなどの羊群構成になっています。飼育目的も肉・毛・その他総合利用という解答が(A)・(C)・(F)、ラム肉生産を主体には(D)・(E)、観光を含めた利用は(G)・(H)となっていました。これらのことを参考に「農場別による比較」を見ていただくと、また違った面が見えてくると思います。繊維の太さ、長さ、クリンプ数などは、飼育環境だけでなく遺伝的なことも関わっています。どういう系統の羊毛を必要とするか、どういう羊群にしていくかの参考になるかと思えます。





また洗毛歩留りは、品種による傾向も見られますが、農場での飼育状況の影響が大きいと考えられます。汚毛から洗毛への数値の差は、羊毛に付着していた脂、汗、汚れ、夾雑物です。脂分や汗の割合は品種や遺伝的な要因が大きいのですが、汚れや、夾雑物は飼育環境の影響大です。牧場によって夾雑物の量の部位差があること（ネックが一番多い牧場、バックが多い牧場、ショルダーが多い牧場など）でも牧場の飼育環境の違いを見ることができます。

今年度からの5年継続調査に入るために、まだつめていかなければならない事もありますが、正直な気持ちとしてできる所から一歩ずつと思っています。今回提供していただいた牧場にも、また他の牧場の方々にも今年度から5年間のフリース提供のご協力をお願い致します。詳細については決まっていない点もありますが、明3才の経産羊で平均的なフリースを毛刈りしたまま（ベリーを外さず）という条件は変わりませので、とりあえずフリースの確保をお願い致します。またサフォークとコリデール種の両方を飼育している牧場はできましたら各1フリースをお願いしたいと思っています。今回の調査方法や詳しいデータなど必要な方はご連絡下されば、お送り致します。こんな事を知りたい、調べてはどうかという提案やご意見もお待ちしています。皆さんの協力で進めていきたいウール部門です。どうぞよろしく。

日本の羊 取り組み部門

Flying Sheep 豊岡 均

レターズ3号でご協力をお願いしたアンケートの結果の概要を報告いたします。

★アンケート調査の集計

◎表1

回答地区		北海道	岩手	千葉	神奈川	静岡	熊本	計
回答件数		6	3	1	1*1	3	1	15
種雄 貸し出し	可	2	0	1	0	2	0	5
	不可	3	2	0	1	2	1	9
	条件付	1	0	0	0	0	0	1
	回答無し	0	1	0	0	0	0	1
	専業	1	1	0	0	0	0	2
経営 形態	兼業	1	1	0	0	1	0	3
	複合	2	0	0	0	0	0	2
	企業	0	1	1	0	2	1	5
	その他*2	3	0	0	1	0	0	4

*1 静岡の牧場に委託飼養

*2 羊毛利用の趣味として3件。公立研究機関が1件。

◎表 2

品 種	飼養 戸数	種雄 貸し出し			雌	去 勢	計
		可	不可* ²	条件付			
サフォーク	8	2	66	4	725	97	894
コリデール	9	13* ¹	12	1	289	130	445
チェビオット	6	1	14	0	70	0	85
ボールドーセット	3	0	8	0	42	0	50
マンクスロフトン	5	0	13* ³	0	22	4	39
サウスダウン	1	0	8	0	19	2	29
ブルーラドーセット	1	0	0	3	5	0	8
ボンドコリデール	2	1	0	1	6	0	8
ジャコブ	1	0	0	0	1	0	1
ベレンデール	1	1	0	0	0	0	1
クロス(雑種)* ⁴	8	2	0	0	175	79	256
計 (頭)		20	121	9	1,354	312	1,816

* 1 胎内輸入(オーストラリア)1頭を含む。

* 2 無回答(サフォーク7頭、コリデール5頭、チェビオット4頭)含む。

* 3 '95秋までの個体移動不可。人工授精及び同一施設内での他品種との交配は検討中。

* 4 上記品種間での交雑種以外にロマノフ、ウェンズレーデール、フィンの交雑種を含む。

◎表 3

飼養頭数	10頭以下	11~30頭	31~50頭	50~100頭	100頭以上
戸数(戸)	2	6	1	1	5

1戸平均 121頭 (全国平均10.7頭、道内平均16.5頭)

◎表 4

放牧場+ 採草地/頭	0.1ha 以下	0.1~ 0.5ha	0.5ha~ 1ha	1ha 以上	無回答
戸数(戸)	7	4	1	2	1

1頭平均 0.59ha

◎表 5

1頭当りの羊舎面積	1坪以下	1坪~2坪	2坪以上	無回答
戸数(戸)	7	3	4	1

1頭平均 0.93坪

◎表 6

飼養目的	毛生産	趣味	種畜生産	観光	肉生産	研究	堆肥生産
戸数(戸)	6	6	5	5	4	3	2

★集計報告

- 1) 回答件数15件。(会員中19名が綿羊飼育に従事)
- 2) 飼養規模は企業・研究機関が多く6件。
全国の飼育統計の平均値をはるかに上回っています。(表1・3・4参照)
- 3) レア・シープ研究会の特色として「サフォーク」「コリデール」以外に11品種が飼われています。(一般農家の場合「サフォーク」の単一飼育がほとんどです)
- 4) 飼育状況はさまざまですが、春から秋にかけて放牧し、冬季舎飼がほとんどです。但し、熊本の場合、ほぼ通年放牧が行なわれています。
- 5) 疫病対策として腰マヒ、腐蹄症の発症しない所では予防も行なわれていませんが、内部寄生虫の駆虫はほとんどの所で行なわれています。
対策を特に講じてはいないと回答されたのは2件です。
- 6) 経営上の問題点として、生産物の販路の確保、放牧場の拡大、優良種育不足、人手不足などが挙げられ、将来的には生産性を高め、羊の全面的な活用を望んでいます。
レア・シープ、カラード・シープの導入・増殖を計画されている所もあります。
- 7) レア・シープ研究会への意見は情報交換の場としての役割に期待されている方が多く、英国レア・シープ・ツアー、年数回の会合などの提案がありました。

以上、概要を報告しましたが、この報告レポートをご覧になり、実際に種雄の借り出しを希望される方や、珍しい品種のフリースを入手したいと思われる方は是非、事務局、又は豊岡宛にお申し出下さい。

今回のアンケートが単なる資料として埋れてしまう事のないよう有意義に活用される事を望みます。国内にもかなりバラエティに富んだ品種の羊達が飼われています。各々の牧場で、様々な目的で、飼われているこれらの羊達がこの先、先細りする事なくその目的を達成する為にこそレア・シープ研究会の存在価値があると思います。

綿羊の繁殖期の大変にお忙しい時期にアンケートにご協力していただいた皆様に心より感謝いたします。



ホワイト・マークの羊たち

本庄 義雄

3月も中、春の遅いここ奥中山にもようやく雪の中から伸びている雪柳の芽がふくらむ頃となりました。我が家のマンクスは、3月10日、12日に2頭の母羊が出産し、雄・雌、雄・雄の両方とも双子でした。18日には雄が生まれ、今年もだんぜん雄が優勢でした。(私の子供は4人とも女の子なので、自然界はうまくバランスがとれているものだと、一人納得しています。残念!)もう1頭の一昨年産まれたブチのモモは、種がついていないようです。5頭の子羊たちは、それぞれの柵から抜け出しては、跳び回り、じゃれ合い、それはかわいいものです。

英国から入った雄の”ロングホース”は、とても勇壮で形の整った4本の角を持っています。ところが同じく英国から入った雌の”おゆき”との間に出来た子は、ここ2年、ホルスタインのようなブチの状態になります。パンダのようにとてもかわいくて喜んでいたので、血統登録がされないとの事、とてもショックでした。よく観察してみると、ロングホースの鼻の上に1センチ程の白い部分があるのです。おゆきとの間に出来た子は、ここ2年とも雄・雌の双子で、雌の方はホルスタイン模様、雄の方は頭頂部に何本かの白い毛がはえています。おもしろいことに、2年とも同じような姿で生まれています。雄の方は日が経つにつれて白い毛はほとんど識別できない状態になります。今年は、ロングホースを種付けには使いませんでした。結果子羊5頭ともホワイト・マークはありません。しかし過去の長い交配の中で、ホワイト・マークを司る遺伝子を持っているかどうかは、実際はわからないのだろうと思っています。ロングホースのように、明らかに分かるもの、その子のように途中で消えてしまうものがあるのですから。血統登録されている親から、ホワイト・マークのある子が生まれた場合血統登録されないとなると、血統とは何かという疑問がわいてきます。血統登録とホワイト・マークのない羊の繁殖とは別扱いにすべきでないかと思っています。マンクスの特徴の一つに、角の数、形状が挙げられると思いますが、ロングホースを種として使用しないと、あの勇壮な形のよい角をもった羊の生産は望めなくなるということ、このことはとても大きな問題だと思っています。

旧約聖書に、主人にしいたげられていたヤコブが、ブチの羊を分けてもらうことになって、白と黒の模様のある枝の前で交尾させた羊の子は全てブチになり、神さまによって大いに繁栄をもたらされたとの話があります。(ジェイコブ種の由来)ブチの羊が生まれたことは、繁栄のしるしのように思えて喜んでいたので、今後、ブチのものはブチのもので別の種として位置づけることも考えられるのかもしれませんが。

現在15頭に増えました。雄9頭、雌6頭です。雪がとけたら畜舎の増築にかからなければなりません。

羊と共に生きる

原 宗茂

羊たちと暮らし始めて足掛け4年。ひよんなことから滝川畜産試験場の臨時職員となって羊達と接しているうちに、すっかりとりこになってしまった。早速その年の初夏に離乳後の子羊の払い下げを受け彼女たちとの生活が始まったのである。現在のところ、というよりたぶん将来も、経営としては成り立たず貢ぎ続けねばならないとしても、もうすっかり我が家にとけこんでしまった羊たちである。

少なくとも100頭程の群れにならないと絵にならないと思いながら、どうにか総勢80頭程に増えてきた。しかし予想以上の食欲で、牧草地は放牧だけで精一杯で冬期間は全量購入飼料に頼らねばならず、また畜舎も狭くなってきたので成羊40頭程に留めざるをえない。全員揃っているかどうか直感的に判断できる数も自分にとっては40頭が限度であるから。

雪に閉ざされる半年間は毛の加工をと、揃えた手紡ぎ道具も埃をかぶったままである。今冬もアルバイトに明け暮れながら、衣食住のすべてにつながる羊の活かし方への想いはあたためているのだが、不本意ながら、肉のことも考えなければならないだろう。ベットとして対処しきれぬものでもないから、おそらく、いつまでたっても食肉として考えることには抵抗が残り、本物の羊飼いはなりきれないだろうが。

初めて屠殺に立ち合った時、何の恐怖もみせず悟りきったかのように穏やかな表情で死を素直に受け入れる羊が実に不思議でならなかった。そしてなぜか「何も提供するものがないので私の肉を食べてください。」と炎の中に飛び込んだウサギの話が思い起された。昔から犠牲とされてきた羊たちの気持ちは知る由もないが、そう思えてならない。何頭かの羊の首に実際に刃物を当て、自分のこの手で羊の生命を奪い取った。さすがにその肉を食べることはまだできないが、もちろん直接手にかけてのではない肉は、美味しさを味わいながら食べられる。罪深いものである。果肉、蜜、乳のおこぼれのみで生きられるわけではなく、他の動物あるいは植物の生命の犠牲の上に成り立っている人の生命。他の生命を犠牲にしてしか成り立たない人の生命。

自分のグータラな言い訳にすぎないのかもしれないが、できるだけ自然にということを中心としていたので、飼養管理という点でも決して良好とは言えない。毛の質も良くないので商品としてのフリースにはならない。肉付きも良くないので商品としての肉にはならない。繁殖という点では問題ないと思うのだが、やはり高栄養ということも考えねばならないのだろうか。せっかくの毛を活用してやらねばならないから。本来なら食べないはずの穀類だが、すごく好んで食べる羊たち。屑野菜とか屑薯に加えてデントコーンのサイレージ等も与えた方がいいのだろうか。

餌箱と草架を兼ねたものもどうにか4作目で満足できるものになり、草架の屑が首の毛に入ることもなく、子羊に汚されることもなくなった。人工の季節繁殖をしていないので、妊娠羊、生まれたばかりの子羊、離乳期の子羊、育成羊が混在する羊舎。似たもの同士の群分けが必要となってきた。何だかんだ言っても結局は家畜としての管理をせざるをえないのである。

アシスタントにと迎えた牧羊犬のアンナだが、まだまだ子供で羊と遊んでばかりで群のリーダーにはなれないでいる。十分な訓練が必要である。羊たちを直接訓練して、人がリーダーになるほうが手っ取り早いかもしれないが。

チェビオット、ポールドーセット、サフォーク、サウスダウン雑種、ブルーラ雑種。それら母親と、ロマノフ＝サフォーク、クロスの父親との間に生まれた2世たち。黒白茶と色々な毛色、ヘアタイプもありの様々な子羊たち。どのような品種が我が家に合っているのかはまだわからないし、方針もまだ定まってはいない。観光牧場にはしたくないが、町の子供たちが羊と遊んだり、羊の毛が糸になり服になる不思議を味わえるようにしたいと思う。そして可能ならば、自分の手で羊を殺して食べるという体験をしてほしいと思う。

羊たちが作ってくれる堆肥で美味しい野菜が育ち、野菜によって子供たちが育ち生活がまかなわれる。毎冬のアルバイト先の仕事も羊の世話。羊たちとの関係もますます深まっていく。

マンクス・ロフタンのウール

百瀬 正香

原種の羊は、私たちに色々面白い現象を見せてくれます。実際に飼育していない私には改良種との飼育上の違いなど指摘できませんが、生きるための本能的な強さを感じますし、生理上のメカニズムの妙にも感心させられます。マンクス・ロフタンも例外ではありません。ウールひとつとっても、普通、サフォークならサフォークの、コリデールならコリデールの定義付があるものですが、マンクス・ロフタンはあまりに広範囲におよび定義付けはかなり難しそうです。現在英国では大々的な調査が行われており、その結果が明らかになると、かなりの部分が明確になると思いますが、今のところウールに関心を寄せている何人かのスピナーたちはマンクス・ロフタン・ウールは3つのタイプに分けられると考えています。日本のウールと比較するため、ここにそれを明記してみましょう。

*長毛で粗いウール (ステイプル長12cm～15cm)

このタイプはほとんどクリンプがなく、ケンプさえ持っています。ハードなツイード、ラグ用糸には向いています。日本にこのタイプは今のところいません。

*短毛のウール (ステイプル長 5cm)

上のタイプに比べると一般にソフトですがオスの中には首や背中 of 辺りにたてがみ様の物を持つるものもいます。このような羊は概して原始的な特徴を持つものが多く、春に換毛することさえあります。まかいの牧場のハロルドがこのタイプですし、他にもその傾向のものがいそうです。これからの観察が必要です。

*中間のウール (ステイプル長7.5 cm～10cm)

首から尾まで均質なウールでクリンプがきれいに入り、ニットウェア、ソフトなツイードに適しています。

*日本のマックス・ロフタン'91, '92 のウール記録 (部位はボディサイド)

羊番号	性別	生年	'91 体重	フリースの重さ	繊維長	番手	テングダー	覚書き
			'92					
3473	M	1989	57K	1.38K	10cm	44s	無	
			68K		10.5cm	44s		
3925	F	1990	25K	0.85K	11cm	58s	無	クリンプがきれいにできている ブルックスができた
			42K		1.04K	7cm		
3875	F	1990	18K	0.79K	12.5cm	50s	無	
			26K		1.25K	11.5cm		
3415	F	1989	32K	1.02K	9.5cm	46s	有	ダニが少々いた
			33K		1.25K	10cm		
3964	M	1990	21K	0.86K	8cm	52s	有	夾雑物が多い
			36K		1.25K	5.5cm		
3418	F	1989	37K	0.52K	4.5cm	50s	有	常態が極端に悪い ウールが固まって刃が通らない
			43K		1.0K	4.5cm		
3866	F	1990	16K	0.72K	15cm	52s	有	
			29K		1.0K	8.5cm		
3985	F	1990	23K	0.86K	11cm	50s	少々有	
			38K		1.35K	5cm		

*体重は'91, '92.とも1月の記録です。

この他にも'91 だけ、あるいは'92 だけという記録もありますが、表としては二年連続記録されている二つの牧場だけを載せて見ました。他に

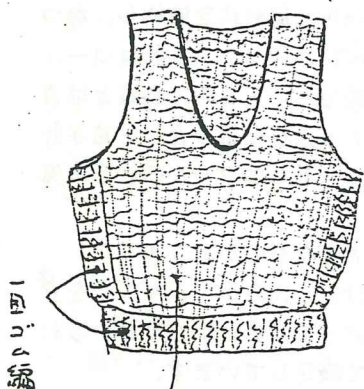
*'91 '92 まとめて、毛刈り初めて (バージンウール) のフリースは10フリース。平均繊維長10.3cm、番手52s。明け三才以上の羊のフリースも10フリース。平均繊維長6.6 cm、番手46s。という結果がでています。

まだ日本に於いての飼育に慣れないためか、天候、環境のストレスがあるからなのか、幾分ウールの長さが足りないものが多く、粗く、均一性が欠けます。どのような羊でも環境や飼育管理のまったく異なる場所に移動させられれば、なんらかのトラブルがずっとつきまとうと、向こうの人達はいいます。恐らく日本生れの二世からは、このような問題も起こらず本領を発揮してくれるのでしょうか。継続した記録の必要性を感じます。



下山里香子

(虫菜上がり100g)



100gの
織み

布地のよこ糸が強撚糸
なので伸び縮みする

このベストは研究会の発足会の時購入した、まかいの牧場のマックスL3998で作りました。マックスの毛質の中では硬めで短毛だったので、何を作ろうかなと迷いました。ニットのような伸縮性のある布地にしたらおもしろいと思い、緯糸は強撚糸を使って織りました。

ぶっつけ本番だったので、60cm巾が30cmに縮んでしまい、両脇にゴム編みを足しても私には着られそうもなく(けっこう太めの私)、母のものとなってしまいました。もう二度と同じ形が作れないベストがなんとなく誕生したので「なんとなくできたベスト」と名付けました。マックスの毛の色と風合いは紡いで織っていて楽しいものでした。これからもたくさんのマックスと出会いたいです。

研究会オリジナル商品紹介

レア・シープ5頭(マックス・ロフトン、ノース・ローノルドセイ、ソーエイ、ノフォーク・ホーン、ウェンズレーデル)のイラストが入った再生紙の便箋と封筒です。それぞれの羊についての説明書も添付されていますので、レア・シープを広めるためにレターセットのプレゼントとしてもいかがでしょうか。5月のフリースデー会場で販売を開始しますのでお楽しみに。それ以後は、研究会事務局と種山ヶ原ショールームで扱います。

飼料計算 その後

Flying Sheep 豊岡 伸子

今回は前号 No. 3 にお便りしました「舎飼時の飼料給与〜」（シーブジャパン No. 4）を実践した経過報告をしたいと思います。

Flying Sheep（以下F.S.）では現在飼養頭数23頭、分娩予定数12頭（内初産6頭）です。今年分娩は2月17日の巨大児5.3Kg♂、4.8Kg♀の双子に始まり、途中2.3Kg♂、3.1Kg♂の双子を交えながら♂の出生頭数先行で、複雑な心境の中いよいよ終盤を迎えなんとか♂7頭、♀7頭のタイに持ち込み、3月20日現在あと1頭の出産を待つばかりとなりました。そしてこの間、飼料設計の見直しの甲斐あってか、母羊の乳の出が大変良く、多少難産であっても立ち直りが早く、後まで響く事ありませんでした。又、見廻りも徹底して分娩兆候を早く発見し、ほとんどの羊の分娩に立ち会いました。その結果、難産の介助が手遅れにならず、今のところ子羊の死亡はゼロです。おかげでこのひと月あまり私は慢性的寝不足状態でした。この分娩結果が飼料計算による飼料給与によるものなのかは定かではありませんが、昨年同時期に比べると母羊のボディコンディションは良くなっているし、授乳期に入った母羊のウールが“はり”を失っていないのは確かです。

これまででもそれなりに考えて給与していた飼料ですが、飼料計算してみるとTDNとCPの値が高かったり、低かったり、特に妊娠後期から授乳期のとても大切な時期に給与量が不足している事が解りました。こうして現状を把握し、金銭的な面を踏まえながら飼料設計を組み直し、実行してみました。

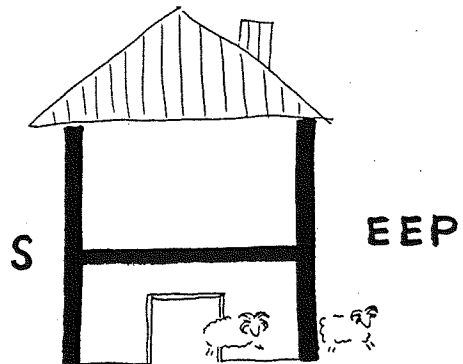
特に冬場、購入飼料に頼らなければならないF.S.ではいかに飼料代を節約し、かつレベルを落とさないようにするかが、一番の課題でした。粗飼料は稲ワラ、これはウールの中にゴミが入りにくく、食べこぼしは敷料になり、堆肥交換で手に入るの良質とは言えませんが利用して、肥育牛用の配合飼料、ルーサンベレット・大豆を組み合わせ給与計画を作りました。今のところ分娩は無事に乗り切れそうなので、あとはウールの状態が気になります。今から毛刈りが楽しみです。

飼料計算は確かに手間がかかるし、計算方法に慣れるまで大変なものがありました。私も遙か昔の学生時代以来の本格的な計算で、頭の中でサビ付いた歯車がギシギシ音を立て、いつブッするかとヒヤヒヤしたものでした。しかし、終ってみると少しサビが取れたのか頭がスッキリとして、後に残された計算用紙の山を見て満足しています。

分娩を無事終え、子羊を引き連れて歩くたくましい母羊の後姿を見ながら「ウーン、羊はやっぱりこうでなくちゃ」とひとりうなづく私です。これで終りという事ではないので夏場の給与計画もしっかり立てて、来年もまた良い結果を出したいと思っています。

F.S. 印のフリースを見たい方、触りたい方、欲しい方、5月23日服部牧場で行なわれるフリースデーでお会いしたいと思います。

追記：この原稿を書いている途中で最後の1頭の分娩が始まり、無事♀の双子を産んでくれました。これで♀9頭、♂7頭、計16頭の（内双児5組み）になりました。やっと枕を高くして眠れます。



自 己 紹 介

◆田中忠二（家から25km離れた帯広市の中学校に勤務）

黎子（高校前でパン・菓子・文房具を置く店を経営）

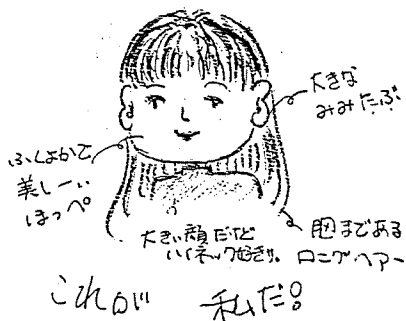
住所は北海道十勝の池田町です。町営のワイン城、まきばの家、ニット製品の会社ボーヤ・ノースランド（コリデールを主に羊をたくさん飼っている）がある清見が丘に住んでいる50代の夫婦です。

羊年の1月、新聞を読んでいた夫が「空いている牛舎で羊を飼いたい」と言いました。「牛と違って手間はかからないし、おとなしくて可愛いよ。毛を刈ってセーターだって編めるし」という話に、動物を飼った経験のない私は簡単に乗せられてしまいました。チェビオット（♂1・♀3）とコリデール（♀1・♂1）の6頭から飼いはじめました。2年目にはチェビオット（♀1・♂4）とコリデール（♀1）が生まれ、アリスファームからジェイコブ（♀1）が来て13頭にふえました。チェビオットの牡が4頭も生まれたのにはがっかりしましたが、すぐ逃げようとする牝と違って行くと一斉に走ってきて顔をすりよせます。また、100kgもあるコリデールは、秋には頭突きで柵を壊してしまい恐ろしかったのですが、冬にはすっかり落ち着いて子羊たちと一緒に頭を出し、撫でてやるとじっとして目を細めるのですから、これだけでも羊飼いはやめられません。

去年の12月には女満別の本間さんを訪ね、マンクス・ロフトンを見せていただきました。一見我が家のジェイコブに似ていましたが、小さい体に大きな角、金茶色の毛はすごい魅力でした。是非飼ってみたいと思いました。可愛がって育てますので、その時期が来ましたら飼わせてください、と言うことでマンクス・ロフトンブリーダーズ部門への参加を希望します。もう一つ希望があります。それは、イギリスへ行ってたくさんの羊を見て歩くことです。マンクスやシェトランドに会いたいし、手紡ぎや織り、編み物の工房も見たい。『イギリスへ行こう』ツアーの企画があることを心待ちにしています。

◆小野多寿子

はじめまして。昭和36年1月12日生まれ、A型、山羊座で無職、秋田に住んでいます。編み物が大好きで、自分で絵を描きそれに近いイメージで仕上げていきます。市販の糸や色では物足りず、自分で紡いで染めることに手を出したのがきっかけで、レア・シープ研究会を知りました。羊の事はほとんど知らないのに入会しました。紡ぎを始めてまだ2年程なので上達してませんが、今年の発足会のオークションでマンクスのフリースを落札し、これを励みに練習しています。もう少ししたら誌上ギャラリーに登場したいという野望も出てきました。他にもぬいぐるみを作ったり籐籠を編んだり温泉グルメをしたりと、無職の特典、限らない自由な時間を気ままに使って日々過ごしています。でも編み機に向かうのが一番長く、ご飯を食べないで編むこともたま～にあります。それくらい好きです。今年は水墨画の世界を編んでいます。会の性格と離れているかも知れませんがよろしくお願いします。



家畜羊の祖先を探る (上) 現存する野生羊とその分布

正田 陽一

家畜羊は学名 *Ovis aries*、偶蹄目、ウシ科、ヒツジ属に属する動物である。ヒツジ属はウシ科の中でもヤギ亜科ヤギ族に入り、ヤギ、タール、バーラル、バーバリーシープなどとも近縁の関係にある。聖書を開くと最初に出てくる家畜が羊であることからわかるように、家畜羊は私たちの生活に古くから深い関わりを持ってきた。その上世界中に広く分布して利用されており、飼養の目的も毛、肉、乳、皮と多岐にわたっているので、成立した品種の数は極めて多く1000種を越えている。これらの家畜羊がどのような野生羊から馴化されたのか、家畜羊の祖先(原種)は何かということについて説明したいと思う。

ダーウィンは「種の起源」の中に「家畜羊の先祖をたどることは徒労に終わるだろう」と書いているが、この分野にはまだまだ不明の部分がたくさん残されている。しかし、最近では血液の蛋白質の多型現象を利用して家畜と原種の間を調べる研究なども盛んに行われており、科学の進歩は近い将来に、ダーウィンも匙を投げたこの難問を解決することだろう。家畜の原種は、その家畜化が行われた地方に当時分布し野生していたものでなければならない。最初に家畜羊の馴化が行われたのは、今から8000年ぐらい前、中央アジアであったことが考古学上の数々の証拠から推論されている。ヒツジ属の野生羊は、角はうず巻型で角根の断面は三稜形をしている。目の下(眼下腺)、四肢の蹄の間(趾間腺)鼠径部(鼠径腺)にそれぞれ臭気のある液を分泌する腺がある。ヒツジは群れを作る性質が強いので、この臭いが群れとして行動するのに役立っている。ヤギのようにオスが強い体臭をもつこともなく、顎髭もない。性質は用心深く臆病な動物である。このヒツジ属には次の6種の野生羊がある。(ヤギ族が比較的新しく分化した種属であるため、種と種の区別がはっきりとせず、独立した種と認めるか亜種として取り扱うかは意見が分かれやすくヒツジ属を1種とする人から10種に分ける人まで様々である)

1. ムフロン (*Mouflon, Ovis musimon*)

一番小型の野生羊で体高は約70cm。角は黒色で、うず巻型だが完全に一回転せず先端は内方または外方に向かう。メスは無角のものが多く、有角のものもずっと小型である。毛色は黒味がかった赤褐色で鼻先と尻、体の下面と四肢の下部は白色。冬季にはオスの背の側面に白い斑紋(サドルマーク)が現れる。四肢はやや短く体つきはずんぐりしている。地中海のコルシカ島とサルジニア島にのみ分布し、険しい山岳地帯に小群ですんでいる。繁殖季は12~1月で4~5月に1または2頭の子を生む。19世紀の中頃にサルジニアのムフロンをオーストリアに放したところ増殖して、今ではかなりの数がヨーロッパ大陸にも野生している。これらは原産地のものより体格が少し大型。

2. アジアムフロン(*Red Sheep, Ovis orientalis*)

アカヒツジともいわれ前者と同種とする学者もいる。体高は約75cm、毛色は黄褐色で背にサドルマークもある。角は初め後ろ下方へ次いで内方へ曲がり、左右の角はふつう先端が首の後ろで向かい合っている。キプロス島、小アジア、イラン、アフガニスタン、トルキスタンに分布する。

3. ウリアル(Urial, *Ovis vignei*)

シャポー(Shapo)とも呼ばれ、人によってはアカヒツジの亜種とみなしている。しかしアカヒツジよりずっと大型で体高約85cm、角は銚色でオスはうず巻が一回転し先端がふつう外方へ向いている。(角の形は地方によってかなり変異がある。)メスの角は短くほとんど彎曲していない。オスの頸の下面の毛は長くのびてふさになっている。体色はムフロンのように色彩が華やかではなく、夏はやや赤味がかった灰褐色、冬は灰褐色で下腹部は白色、肩の後ろの背の正中線には暗色の条斑がある。尾は他の野生羊がみな短尾であるのに対し比較的長い。適応力が広く、各地で亜種が分化している。カスピ海とアラル海に近い草原地帯にすむヒツジはアルカル(Arkali, *Ovis orientalis arkali*)と呼ばれ、野生羊が一般に山岳丘陵地に生活する中で唯一の草原棲のものとして注目される。

4. アルガリ(Argali, *Ovis ammon*)

一番大型の野生羊で体高は約120cm。角も大きく立派で成熟したオスではうず巻は一回転以上になり、先端は外側に開いている。長さは曲がりに沿って測ると120cmを越え、長いものは2mに達する。角の外側の縁は円味を帯びているが内側の縁は鋭く、基部は太く全面にわたって盛り上がった皺が重なっている。メスは体も小さく角も細くなる。13世紀にマルコポーロがパミール高原で見た巨大な角の野生羊は、彼の名を冠してマルコポーロシープ(Marco Polo's seep)と呼ばれているが、本種の一亜種パミールアルガリ(*Ovis ammon polii*)である。毛色は夏季に淡褐色、冬季に灰褐色で、頸の上から肩にかけて正中線に黒色の長毛がある。四肢は長く強硬で乾燥した山岳地帯の岩場をすみかにしている。分布は中央アジア、ネパール、ロシア中部・東部、モンゴル、中国北部にわたり、たくさんの亜種に分かれているが、カザクスタンに住むアルカー(Arkhar, *Ovis ammon karelini*)と呼ばれる亜種は現在の家畜羊とかけあわされて品種改良に利用されている。(アルガリ系のアルカーは前述のウリアル系のアルカルと名前が似ていて混同されやすいので注意)

5. アジアビッグホーン(Snow sheep, *Ovis nivicola*)

アジアオオツノヒツジとも呼ばれ、北アメリカのビッグホーンの亜種として取り扱う人もいるが、染色体数は $2n=52$ で、ビッグホーンの $2n=54$ と異なっている。シベリア東部からカムチャッカ半島にかけて分布していて、角はビッグホーンより短く細く先端も尖っていない。毛色は灰色で、口と下腹部、四肢の下部、尻は白い。山地に小群を作って生活し繁殖季は11～12月で、翌年5～6月に子を産む。

6. ビッグホーン(Bighorn, *Ovis canadensis*)

北アメリカに住む唯一の野生羊で、別名オオツノヒツジ。角は太く頑丈で長くはないが一回転以上巻いて先端は外側を向いている。角の前面はアルガリと反対に内側の方が円味を帯びている。体高は約95cm、体つきはがっちりしていて体毛には緬毛が欠け、5cmくらいの粗毛で被われている。毛色は白色、灰色、褐色、黒色と産地により様々で、それぞれ亜種として区別されている。カナダ以北からアラスカに住む白色のビッグホーンは、ドルシープ(Dall sheep, *Ovis canadensis dalli*)と呼ばれ、別種とする人もいる。

このほかヒツジに近縁の動物で、ヤギ族に属しヤギ属とヒツジ属の中間に位置するもの(半羊とも呼ばれる)について簡単に触れておこう。家畜羊の先祖の一つと考えられたものも含まれている。

●バーバリーシープ(Barbary sheep, *Ammotragus lervia*)

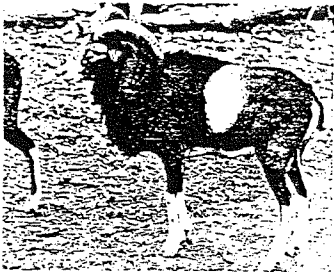
体高約 100cm、角は大きく外側にのびそれから内下方へ巻き込んでいる。全身淡褐色で体下面と四肢の内側は白っぽい色をしている。頸の下面と前肢の付け根の部分の毛が長く豊かなふさ状になっているのでタテガミヒツジの別名がある。北アフリカの岩石の多い乾燥した荒れた土地に群れを作って住んでいる。

●バーラル(Bharal, *Pseudois nayaur*)

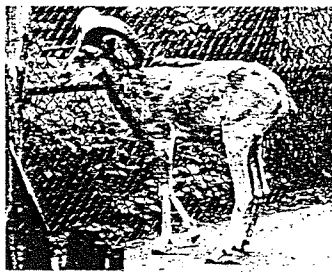
アオヒツジ(Blue sheep)の異名を持つ。体高は約80cm、毛色は青味を帯びた灰色で腹部は白く、その境界部に黒色の筋がある。角は表面がなめらかで外側から後内方へ巻き込んでいる。ネパール、モンゴル、中国、チベットの山岳地帯に群れをなして住んでいる。

●ヒマラヤタール(Himalayan tahr, *Hemitragus jemlahicas*)

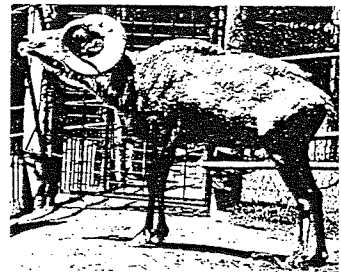
体高60~100cm、角はオス・メスとも短く三日月形。毛色は赤褐色で頸から肩に長毛がたてがみ状にのびている。ヤギに似ているところが多く、家畜羊の先祖と考えられたこともあったが、鼻鏡の発達している点や乳頭が4個ある点など他のヤギ族のものと異なっていて、シャモア族に近い特徴を示している。ネパールとインド北部の森林の多い山岳地帯に群れで住む、臆病で用心深い動物である。タール属にはこのほか、ニルギリタール(*H. hylocrius*)とアラビアタール(*H. jayakari*)がある。この両者にはたてがみが無く、毛色は前者は暗い黄褐色、後者は淡い黄褐色。(つづく)



1. ムフロン(Mouflon)



2. アダムムフロン (Red sheep)



4. アルガリ(Argali)



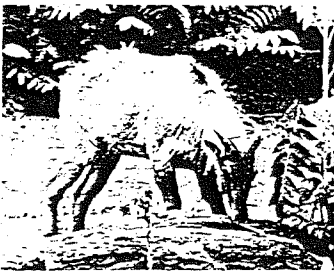
6. ビッグホーン(Bighorn)



バーバリーシープ(Barbary sheep)



バーラル(Bharal)



ヒマラヤタール (Himalayan tahr)

野生羊が見られる主な動物園

- ムフロン多摩動物園 (東京)、桐生、千葉
- ビッグホーン金沢動物園 (神奈川)、釧路、盛岡
- ドルシープ東山動物園 (愛知)、到津
- バーバリーシープ上野動物園 (東京)、東山動物園
天王寺動物園 (大阪)、福岡動物園 (福岡)
- バーラル金沢動物園 (神奈川)、京都

毛刈り講習会に参加して

2年ひつじ組 金指 歳

私は羊に携わって12～3年に成ります。最初、種付時の平均体重33キロと言う最悪のサフォーク種を10頭、宛行われて難産と戦い、産子数の少なさにゲツソリして、その後また毛刈りか……と、言うわけで正直何で生えてくるのと思いながら、本に書いてある毛刈りの方法を見たり聞いたりして40分くらい掛かって羊も人も、ぐったり疲れて刈り採って（つみ採って）いました。それでも何年もやっている、それなりに刈れるように成るものですが、いつも気持ちの中に本当はどうやるのだろう、と言うのがガンみたいにあって時と共にゆっくりですが病状が進みつつありました。

そんな時、講習会を開いて頂き昨年と今年二回参加致しました。一年目は自己流の刈り方よりもスピードがおちました。二年目講師の話していることが分かるようになり、動きのポイントも掴めてきたので今年こそはと、羊を見ると腕が何となくムズムズして顔もゆるんで他人が見たら気持ちの悪いオジさんになってます。それからガンは転移して刈り採った羊毛を、なんとかしてみたくなりました。でもどうすれば良いのか分からなくて糸にするのに二年も掛かってしまいました。

私はラム肉生産から始まった羊飼いなので、どうも羊毛の扱いが乱暴に成りがちです。講習会のソーティングで部位に因る毛質の違いを聞いても、一年前は全部まとめて洗ってしまえばいいだろうと思っていましたが、この一年、少し羊毛製品を作ってみて、講習会で多くのフリースと、それで作った作品を見せてもらおうと、ちょっと考えが変わってきました。夜のミーティングで自分の作った物を見て頂いて批評して頂くのも大変有り難く思えます。すこしずつで良いから物作りも前に進めていきたい。

どうも講習会の優しい？オバさんも、気さくなオネエさんも見えているのは冰山の一角で水面下に凄いものを隠している気がします。

このごろ何となく、羊という動物を理解でき始めた気がしています。

*講習会 会計報告

収入	支出
講習料 27000 × 7 = 189000	講師料 30000 × 2 = 60000
雑費 1200	交通費 48000
計 190200	テキスト代 4500
	ワープロ代 4000
	宿泊 2500 × 7 = 17500
	朝食 800 × 7 = 5600
	茶菓子 2850
	計 142450
190200	
-142450	
(残高) 47750	

5月11日(火)12日(水):小岩井農場でシェアリング、クラッシング講習会を行います

会計報告（1992年1月～12月）

● 会員会費の部

収入

入会金	(2000 × 12)	24000
会費	(3000 × 14)	42000
家族会費	(5000 × 2)	10000
家族会員変更	(2000 × 2)	4000
	小計	80000
前年度繰り越し		228000
	計	308000

支出

発足会(事務費)		10900
レターズ1号		36033
レターズ2号		35494
レターズ3号		30508
交通費(龍巖のため)		5700
会の印鑑		5270
名簿作成		6000
	計	129905

$$308000 - 129905 = 178095$$

● 研究費の部

収入

講習会(主催1回)		253000
講習会(委託1回)		10000
ひっじの絵はがき		133680
マクス・ロフカ フリース		36800
シープ・スキン		170050
Tシャツ		98835
会で扱っている商品		146005
(カード、本、ポスター、等)		
寄付		37540
利息		6833
	小計	892743
前年度繰り越し		231915
	計	1124658

支出

講習会		215978
講習会(ワ-ワ)		5000
商品の制作		5100
(イスの靴下、マフラー、等)		
商品の仕入れ		26120
シープ・スキン 仕入れ		121157
Tシャツ制作		133335
通信(研、等)		10736
事務(購、ビ、等)		4228
交通費(龍巖のため)		2200
その他		10981
	計	534835

$$1124658 - 534835 = 589823$$

$$178095 + 589823 = 767918$$

総残高 767918

内訳	銀行	普通	280347
	郵便	定額	300000
	郵便	普通	179728
	現金		7843
		計	767918

★講習会、会計報告の詳細はレターズ1号で記載済みですので、ここでは省略させていただきます。

この報告に間違いのないことを証します。

'93年 1月 31日  

会費振り込みのお知らせ

当研究会も発足して丸一年たちました。今回のレターズでは各部門それぞれが取り組んできた、調査、研究の報告をすることができ、一年の締めくくりらしい内容となりました。また、正田先生の新シリーズ「家畜羊の祖先を探る」が今回から登場します。各メンバーの地域的な広がりが大きいため、一ヶ所に集まることがむずかしい中、編集、商品部門はレターズの編集、マンクス・ロフタンのフリースのチェックや抽選会、新しい商品の検討と、かなり集まりをとってきました。当研究会が更に発展あることを願いつつ、1993年度の会費振り込みをお願いいたします。郵便振込用紙を同封いたしますのでご利用ください。尚、都合で退会なさる方は事務局までお知らせください。

1993年度レア・シープ研究会会費 3000円 家族会費 5000円
締切り 1993年5月10日

第4回カラード・シープ・国際会議

1994年7月25日(月)～29日(金)まで、カラード・シープ国際会議がイギリス、ヨークシャー、ヨーク大学でレア・ブリード・サバイバル・トラスト(稀少家畜保護団体)主催で行われます。この会議は1978年に南オーストラリアで1回目が行われ、それからニュージーランド、アメリカと5年毎に行われてきたものです。第1回目の指針は“カラード・シープの飼育とカラード・ウールの利用”であり、アット・ホームな集まりから出発したといわれるこの会も、回を重ねるごとに大きくなり、充実した研究発表、クラフトのデモンストレーションやワークショップ、ファッションショー、カラード・シープやフリースの競技会、数々のショップ、と広がりのあるものとなってきました。今回は更に、カラード・シープだけではなくカラード・ファイバーを持つ動物もと、範囲が広がっています。

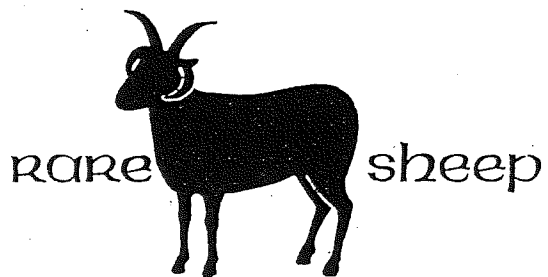
私たちとしましても、マンクス・ロフタンをイギリスから導入し、その後の経過をイギリスのブリーダーに報告しなくてはならない立場でもあり、今、スタンドを一つ申し込んできてあります。

尚、本会議の前にヨーク溪谷、エジンバラ、湖水地方へのツアーが7月17日から23日まで用意されています。また、会議中の1日は、英国で最も大きいといわれているシープ・イベントを見学するためモールヴァン行のバスツアーがあります。

当研究会としてこの会議に出席希望の方たちの申し込みを、受け付けることにいたしました。出席希望の方お早めにお問い合わせ下さい。

編 集 後 記

いよいよ春です! 各牧場では、新しい生命の誕生があったことでしょう。また、その親羊たちは、伸びきった一年分の羊毛を着ているのでしょうか。バリカンを使う手が震える皆さん、そのフリースを待ち焦がれている皆さん、皆さんのパワーが集まってレターズはできあがるのです。これからも頑張りましょう。(佐藤しおり)



1993年4月発行 第4号 (年3回発行)

編集・発行●レア・シープ研究会 百瀬正香

〒247 神奈川県鎌倉市大船6-10-58

Tel. Fax. 0467-47-5516